

心房細動の治療と管理 Q & A 第 2 版

井上 博, 新 博次, 奥村 謙 著

＜書評者＞ 杉本恒明（関東中央病院名誉院長）

心房細動はありふれた不整脈である。加齢に伴って現れる、避けられない種類の病態のように思える。60 歳代で 1%, 80 歳以上では 5% にみられ、日本では 70 万人もがこれに悩まされているという。心房細動は生活の質 (QOL) を損ない、心不全を悪化させる。ことに年間 1~5% が脳梗塞を発症し、一方、脳梗塞症例の 4 分の 1 が心房細動に由来するといわれる。血栓の予知・予防が重要課題となっている。心房細動にはまず、薬物治療によって対処するが、これにはリズム・コントロールとレート・コントロールとがあり、一長一短がある。最近、これに日本でのデータが加わった。近年、カテーテル治療が良い成績を挙げるようになった。カテーテル・アブレーション治療の効果は発作性で 70% 以上、持続性で 22~45% となっている。アブレーションは肺静脈を心房から隔離するものであり、この効果から、心房細動の病態理解のための手がかりが得られつつある。

つまり、心房細動は日常的にみられるがゆえに、臨床医が普段の診療の対象として知っておかなければならない不整脈であり、かつ、特殊治療の選択肢があるがゆえに、少なくとも知識として病態と治療に関する最新の知見を知っておかなければならない病気なのである。

本書は質問と回答、Q & A という形で編集されている。9 つの章について、57 の質問と回答が口語体で記されている。回答には Expert's Advice が添えられてあり、まず、ここに結論を提示してから、解説がつく。解説も Q & A を詳述する形になっていて、多くの図や表が添えられ、文献も適度にそろっている。本書は井上 博, 新 博次, 奥村 謙 3 氏の、共同編集ではなくて共著である。このため、それぞれの個性がみられて、親しみやすく読みやすい。付録には、学会の治療ガイドライン、治療薬一覧、シシリアン・ギャンビットが紹介されている。

本書は第 2 版となっているので、初版と見比べてみた。体裁は

似ているが、初版の 6 章が今回は 9 章となっている。構成がまったく違っていて、内容も異なる別の書物になっていた。大きな違いはカテーテル・アブレーションと外科治療の章が加わったことであろう。学会が示すガイドラインには診療水準を高める効用があるが、診療は個別の症例に則したテイラー・メディシンでありたいという。そこで、本書はガイドラインを基準としながら、これに専門医としての経験と知見を交えて著述されたのであるという。

書評を書くために勉強させられて、得られた新しい知見が多くあった。自分自身の診療のあり方に反省させられたこともあった。重ねていうことであるが、心房細動は一般臨床医が扱い方を知っていなければならない疾患である。本書は心房細動について、あらゆる角度からの疑問を発し、そして、それに答えて、全容を明らかにしている。研修医はもちろん、第一線診療医家の必読の書として広くご推薦したい。

●B5 頁 320 2009 年
定価 5,460 円
(本体 5,200 円 + 税 5%)
[ISBN978-4-260-00745-0]
医学書院 刊